

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

平成23年11月1日(第1210号)



発行／(社)秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306



「どしゃぶり」 絵／文 白澤 恵舟

時雨の中を孫が帰って来た。
「ただいま〜」と大きな声。
濡れた靴をぬぎっぱなしで
ドンドンと二階に直行。
今日も元気いっぱいだ。

災害大国において社会資本整備は不可欠

東北建設業協会ブロック会議開催

東北建設業協会連合会は10月25日、秋田ビューホテルを会場に東北建設業協会ブロック会議を開催。建設業、行政関係者約180名が参加し、今般の建設業、社会資本整備をとりまく諸問題について意見を交わした。

東北建設業協会連合会の佐藤博俊会長は会議冒頭の挨拶の中、災害大国である我が国において社会資本整備は不可欠として、「社会保障の一つとしての位置づけ、地域建設業が“危機管理産業”であることの位置づけ、公共事業の入札・契約制度は会計法・自治法にとらわれずに品確法の改正などにより一元化することの3つが震災復興に向けたキーワード」と主張した。

会議は挨拶の後、村岡淑郎秋田県建設業協会会長を議長に議事を進行、▽「東日本大震災」復旧・復興のための予算確保▽国民の安心・安全確保、災害に強い国土づくりとそのために必要な公共事業予算の確保▽持続可能な地域社会を構築するために必要な地域建設業の存続▽入札・契約制度の適正化の推進▽「東日本大震災」復旧・復興工事における地域建設業への優先発注・活用▽高騰する資機材及び労務単価等への実勢価格の反映▽「東日本大震災」の影響による工事実績等の取扱いについての7項目を提起し、各県建設業協会からそれぞれの内容を説明し、国土交通省の見解を求めた。



国土交通省は震災対応について、被災地の復興だけでなくそれ以外の地域の防災強化を考えるとこれ以上の予算削減は困難、との認識を表明し、予算確保へ全力を挙げる考えを示した。また、地域防災力強化を鑑みて重要な地域の業者を確保するための地域維持型JVの実施に向けた検討を進めていることを説明した。

東北地方整備局

優良業務施行会社、優良工事施工会社並びに工事成績優秀地域企業を表彰

優良工事施工会社として

菊地建設(株)・日高建設(株)・(株)大和組

東北地方整備局は10月5日、KKRホテル仙台を会場に優良業務施行会社、優良工事施工会社並びに工事成績優秀地域企業の局長表彰を発表、表彰式を行った。

この中、優良工事施工会社33社の内、本会会員では菊地建設株式会社(橋本一康社長・由利本荘市)、日高建設株式会社(日

高英樹社長・仙北市)、株式会社 大和組(大和康範社長・横手市)の3社が受賞。平成22年4月1日から平成23年7月31日に完成した工事で、工事成績が優秀で卓越した技術力や創意工夫があったもの、困難な条件を克服したものとして今回の荣誉に輝いた。

[受賞会員・工事名]

- 菊地建設(株)
平沢地区舗装工事
- 日高建設(株)
八幡平山系蟹沢第1砂防えん堤工事
- (株)大和組
大曲職安(O9)増築その他工事

県協会

新規学卒者研修会(後期)を開催

自己分析、コミュニケーションの基本について演習

県協会では、平成23年度新規学卒入職者(新入社員)研修会後期分を10月7日、秋田ビューホテルにおいて開催した。研修会には、この春会員企業に採用された新入社員を対象にフォロー研修を実施したとこ



ろ30名の参加となった。初めに本日の講師である日本コンサルタントグループ酒井誠一氏より「東日本大震災により震災復旧という建設業会にとっては最優先される状況の中、これから社会人2年目に入っていられる皆さんがどう飛躍していくか、イメージした通りの業界か、イメージしていなかったところだったか、両方を見極めて、どう一人前になっていくかについて本日は『働くことの難しさ』『一人前になるためには何が必要か』という2つの課題にしたがって学んでいただき、更なるレベルアップを図って欲しい」と挨拶した。

研修会では、研修オリエンテーションとして、働くことの難しさ、一人前になるた

めに何が大切か事例について意見を交換し「仕事は主体性を持って取り組んでいくこと。苦手な事(人、仕事)に対して何事もポジティブに取り組むことがいい結果も運も呼び込む。」ことを学んだ。自己SWOT分析ではグループに分かれ、S(自分の長所)W(自分の短所)O(職場環境のプラス側面)T(職場環境のマイナス側面)について、シート作成、グループ内発表、討議を行った。午後からは、コミュニケーションの基本、コミュニケーションの事例演習交渉力について講義があり、問題解決についての演習が行われ「責任には『実行と結果』の二つがあり、それぞれ「ほう(報告)れん(連絡)そう(相談)とワンセットである。『ほうれんそう』は早く!マメに!悪い情報ほど早く報告する」ことを学習した。

建退共秋田県支部

北海道東北ブロック加入・履行促進支部事務担当者会議を開催

システム最適化・業務の現状について意見交換



建退共秋田県支部(村岡淑郎支部長)は、10月31日(金)秋田ビューホテルにおいて、建退共(勤労者退職金共済機構建設業退職金共済事業)本部と北海道・東北ブロックの支部事務担当者による加入・履行促進支部事務担当者会議を開催した。

建退共本部からは、昨年最適化された新手帳作成システムの追加開発についての報告と、現在手帳申請に使用されている「手帳申込書」「掛金助成更新申請書」「手帳更新申請書」をパソコンで直接入力できる様式の策定について、本年12月上旬の建退共本部Webサイトへの掲載を調整していることを説明。また、災害救済法が適用された市区町村に対する特別事務処理についての確認事項と加入履行証明書の支部での取扱いにおける注意事項について支部へ協力を要請した。

意見交換では、支部担当者より県市区町村への加入措置の文書や加入促進強化月間のポスター等について毎年同じ内容で変化が乏しいのではないかと、内容や言い回しなど検討してほしいと要望が挙げられた。

次期開催県は宮城県。

(財)建設業福祉共済団から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋田水風景

文と写真/加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴/旅の手帖、WoodyLife、ペンチャー・リンク、郷、ある他
海外取材歴/ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写案 主宰/写真教室、撮影ツアー企画等

Vol.28

白瀑

【しらたき】

山本郡八峰町八森



八峰町のA温泉ホテルは、施設全体を近代的なホテル造りに一新して新装オープンした。未だ不景気風が吹きすさぶ東北で、この時期の設備投資とは思いきったものだと思うのだが、聞けば、東北新幹線の青森延伸にともなうシャワー効果を大いに期待したものだったという。「ところが、新幹線が開通してす々の震災と原発事故で客足がパッタリと途絶えて、もくろみは見事にはずれました」と、支配人は苦笑いをしていた。

思えば、かつて観光振興の願いも込めて旧八森町と青森県西目屋村を結ぶ青秋林道なるものの建設が計画され、しかしそれは自然破壊につながるものとして喧々囂々の議論の末、建設は中止となり、結果的にそれが白神山地の世界自然遺産登録につながったという経緯がある。好むと好まざるとにかかわらず、人は自然に影響を与え、自然は人に影響を与えるものである。あるいは、白神山地の世界自然遺産への登録が、人と自然との関わり方を改めて教えてくれたと、言えるのかもしれない。

A温泉ホテルから車で5分ほどのところの山裾に白瀑(しらたき)神社があり、その社殿の背後に落差17メートルの白瀑がある。毎年8月1日に「みこしの滝浴び」が行われることでよく知られた滝だ。祭礼の日は大勢の見物客が繰り出す、それ以外の時は訪れる人もまばら。しかし逆にその「忘れられた空間」ぶりが、人々にほっこりとした癒しのひとときを与えるようでもある。

A温泉ホテルにはぜひとも繁盛してほしいが、同時に、白瀑のあたりには余り大勢の人には練り出してほしくないような、想いもある。思い立った日にふらりと白瀑を訪れ、そのついでにホテルの風呂にも入るとか、あるいは逆に、ホテルへの日帰り温泉ドライブのついでに白瀑も見るとか、そんな、さりととしたつきあい方をしてほしいものだ。

川柳は楽し

あゆかわのぼる

NHK秋田放送局の『ひるまえこまち』というテレビ番組で川柳の選者をしている。

断っておくが私は、川柳作家ではないし、したがって所謂“柳人”といわれる粋さを持ってもない。

一応、詩人と自称しているが、世間がどう見ているか、これもまた、分からない。

実はハイティーン(懐かしい言葉ダナァ。今も使われているのかしら)の一時、熱に浮かされたように川柳を作っていた事があり、嘲笑われるのを覚悟で言えば、「県柳壇に天才少年現る!」と言われ、秋田市大町にあった古書店『松坂屋』の主人で柳壇の重鎮でもあった三島亮さんから殊の外可愛がられた。

十七、十八、十九才の三年間、数えたわけではないが少なくとも五百句、もしかしたら千句ぐらい作って、せっせと当時の秋田魁新報の『さきがけ川柳』という投稿欄に送り続け、度々掲載され、推薦作家にもなった。

なぜ、川柳を作り始めたのか定かでないし、川柳がどういう文学なのかも知らなかったし(今も知らない)、もちろん師はいないし結社に所属するわけでも雑誌を読むわけでもなく、ただひたすらに5・7・5と指を折って言葉を当て嵌めていた。

詩は中学生の頃から作っていた。だから、なぜ川柳を突然作り出したか、いくら過去を掻き回しても分からない。それが二十歳を前にしてピタッとやめた。再び詩に戻ったのである。ピタッとやめた理由も分からない。よくこういう場合、壁に突き当たった、というような言い方をしますが、壁に突き当たるような川柳との付き合いではなかったし、まだ少年の遊びみたいなのだから、周りから「あゆかわは詩から逃げた」などと指摘されたわけでもないはずだ。

とにかくピタッとやめ、以降全く関心を示さず、五十年が過ぎた。

そんなある、二年半ほど前の年明けごろの事、NHKから電話があり、「新年度からバージョンアップするお昼前のワイド情報番組『ひるまえこまち』で、視聴者から寄せていただく秋田弁を織り込んだ川柳のコーナーを設けることにした。ついては選者を引き受けてほしい」

と言う。私は一瞬息を止めた。
(オレが川柳?)

秋田弁なら二十年くらいから関心を持って取り組んでおり、NHKのテレビやラジオの番組でも解説するなど紹介してきたが、川柳とは、またどうした事だ。

私は、かつて熱に浮かされたように川柳を作っていた事など遙か記憶の彼方だったからびっくりした。

しかし、こういう時、簡単に辞退する男ではない。二つ返事とはいかないまでも引き受けた。

川柳ブームであった。新聞も雑誌も競って川柳を載せる。きっかけは保険会社が始めたサラリーマン川柳だったかもしれない。これらはほとんど遊びだが、本格川柳も結構盛んで、県内にも多くの結社があり、雑誌がある。

短歌の“雅”、俳句の“わびさび”や季語も川柳にはない。一応“うがち”というらしいが何の事が分からなくても構わない。日常の茶飯の隙間に挟まった事柄、魚の小骨みたいなものを5・7・5に嵌め込めばいい。

高を括って始めた。

二つの不安はあった。一つは、作品が寄せられるか。もう一つは、結社で勉強している指導者や愛好家が、素人の選にどう反応するか。

しかし、この二つ、全く杞憂。作品はどんどん寄せられ、一週間にほぼ五十句前後、多い時は百句を越す。そして、その中に、本格的に勉強しているらしい人の作品はほとんど見掛けない。これはペンネームで分かる。例えば“横手のアップルちゃん”とか、“男鹿の潮風”という類のペンネームが多く、間違っても所謂雅号らしいものは一、二。作品もほほえましくて楽しくて初々しいものばかり。おまけに秋田弁を織り込むわけだから、土臭くて日常生活がそのまま出て、切なくもなるが元気を貰って選ぶのが楽しい。

しかも尚、寄せられる作品の作者のほとんどがお年を召した方々。卒寿を過ぎた人もいる。かてて加えて、数人の、本格的に勉強している人以外は川柳というものを全く知らず、この番組を見て初めて知り、私が「身の回りで発見した事を5・7・5と指を折って表現してみてください」と言うからやって見た、という。

中には作品だけでなく、封書入り、便箋数枚の告白文まで届く。例えば、

「夫の介護をされていて、今まで何度も二人でいっそ死んでしまおうと思ったが、テレビで川柳を知って今は人生の励みにしている」とか、「夫を亡くして鬱病になり、薬を飲み、外に出ず、テレビも見ず、毎日下ばかり見て塞ぎ込んでいたが、ある日たまたま見たテレビで川柳を知って、作って投稿し始めたら、毎週テレビを見る楽しみが出来、ついにゲートボールも始めた」。

傘寿を迎えた女性は、「私が川柳を始めたら嫁もやるようになり、二人は家庭内ライバル。どちらかの作品が入選の知らせを受けると、近所のバアサンやカアサンたちが我が家に集まってテレビの前でがっこと茶っこを楽しむようになった」など、思わぬ効果が表れ始め、何人か助けをしているような面映ゆさ。

テレビカメラの前では取っておきの共通語で話しているつもりなのに、「あなたが秋田弁で話をする、忘れかけていた方言を思い出し、自然に顔が緩んでくる」とからかわれる。

ここには文学的な難しい話は全く入ってこない。笑い転げ、時には涙し、あるいは腹の立った事を5・7・5にして表す。

毎週火曜日、放送が終わると、寄せられた次回用の作品を持ち帰り、木曜日までの三日間は川柳浸り。大変だけれどもそれぞれの作品から作者の様子を思い描き、丁寧に読み、優れた作品、心の籠った作品を選び、充実した時間を過ごす。

再度はつきり言うておおくが、青春の一時、訳も分からず川柳を作り続けた素人。選をする能力があるとも思えず。もちろん今は、作れもしない。

しかし、川柳は楽し。秋田弁。これもまた楽し。

作る人も読む人も元気に、幸せになれる。

川柳は、楽し。